

ポスト資本主義世界「テクノ封建主義」デストピア

ヤニス・バロファキスへのインタビュー

インタビュアー：ジェイソン・マイルズ&パスカル・ロバート（リアル・ニュース・ネットワークの This Is Revolution 編集者）、脇浜義明訳（抄訳）

出典：The Real News Network, 2022年2月22日

・・・(前略)・・・

ジェイソン・マイルズ：2008年金融危機から分かることは、資本主義は新しい形態、場合によってはもっと恐ろしいものに変身できるということです。これからインタビューするバロファキスは、紙幣を印刷してグローバル金融を維持する能力がある中央銀行は、価値抽出（value extraction）を市場からデジタル・プラットフォームへ移行させ、新しいテクノ封建主義（techno-feudalism）の創造を可能にした、という説を提起しています。この説を詳しく聞くために、元ギリシャ財務相で、現在 MeRA25 党¹の設立者で指導者のヤニス・バロファキスとインタビューします。よろしく。

ヤニス・バロファキス：よろしく。

・・・中略・・・

ジェイソン・マイルズ：あなたは SF 小説も書くのですね。最近買って夜中の2時まで読みました。「月の裏側で働かされている少年サムは、自分が安価な使い捨て労働単位として会社から作られたクローン人間の一つにすぎないことを知り、さらにとっくの昔に死んだと教えられていた家族が地球で自分の帰りを待っていることを知って、気が狂いそうになった」という文を読んで、あなたのデストピアが描かれていると思いました。

「SF は未来の考古学だ」と言った左翼思想家がいました。SF が現在に関するドキュメントを未来に残しているのですね。あなたの『もう一つの現在』(Another Now) はテクノ封建主義の到来を予言する SF ですか。

ヤニス・バロファキス：そうなるのでしょうか。SF は、SF に興味がない人も含めて、万人の思考形式の一つです。4万年前のオーストラリアのアボリジニも、洞窟の壁画を見ると、存在しないものを想像していたことが分かります。古代ギリシャのプラトンも SF を使いました。SF を意識したわけではないでしょうが、彼の『国家編』は SF 的装置を使っています。ある羊飼いが森の中で指輪を拾った。それを指に嵌めて捻じると、自分の姿が消えることを発見した。彼は透明人間になって宮殿へ忍び込んで、王を殺害し、妃と結婚して、支配者となった、という話を書いています。この話を通じて、この羊飼いが良き人生を送るだろうか、そういう行いで幸せになれるだろうか、という問いかけをしたのです。

私は SF テレビ・シリーズの『スタートレック』のファンです。私が以前に書いた『娘への経済解説 — 資本主義小史』(Talking to my Daughter About the Economy: A Brief

¹ 2018年に結党した左翼政党。「ヨーロッパ現実主義的市民的不服従運動戦線」。

History of Capitalism) ²の中で、「人間はテクノロジーといっしょに歩む種である。私はテクノロジーの使われ方が気に入らないが、テクノロジーを好む「コンピューター・オタク」だ。しかし、インターネットやAIが進化する中で、将来必ずある分岐点にぶつかる」と書きました。

この進化の到達点の一つはSF映画『スタートレック』の自由主義的共産主義 (liberal communism) 世界かもしれない。そこは財産権もカネもない世界です。壁の穴から食べ物や必要なものが出てくるので、誰も労働して生活費を稼ぐ必要がないのです。みんなは思想や哲学を語り、宇宙を研究する。金銭とか商売を考えなければなくなるのは、まだネオ・リベラル・デストピアにしがみついているヒューマノイド型異星人のフェレンギ星に宇宙船が着いたときだけです。テクノロジー進化が連れて行くかもしれないもう一つの世界は英国映画『マトリックス』の世界です。あの映画では、主人公のネオとその仲間たちは機械の召使いとして働いている。初めはそのことに気付かず、通常的生活を送っていると思っていたのですが、それは実は仮想世界の中でのことで、実際は機械に電気を供給するバッテリーとして働いているのです。

カール・マルクスは偉大な資本主義批判者で、資本の私的所有世界の中で開発されたテクノロジーは人間の召使いにならずに、反対に人間がテクノロジーの召使いになることを指摘しました。そういう社会が『マトリックス』の世界です。SFは我々の現在を構造化する素晴らしい仕組みで、未来を描くものではないと、私は思っています。

ジェイソン・マイルズ：面白い議論で、私が以前住んでいたカリフォルニア州の住民立法「プロポジション22」を思い出しました。ウーバーやリフトがカネをばら撒いて住民投票で成立した州法で、ギグ労働者を個人事業主として、ギグ経済の中で辛うじて持っていた労働者としての権利を破壊したのです。それ以前にはAB5と呼ばれたギグワーカーを保護する法律がありました。あなたはカリフォルニア州法改訂のことをご存知かどうかは知りませんが、昔はギグワーカーは個人事業主でなく労働者として扱われていました。

ヤニス・バロファキス：そのことは研究しましたよ。

ジェイソン・マイルズ：ギグワーカーを保護する法律があったときでも、組合結成が認められませんでした。ウーバーやリフトやその他の食品配送会社やプラットフォームがギグワーカーを労働者として扱う法律の無効を主張して、プロポジション22を成立させたのです。つまり、ギグワーカーがマトリックスの中の労働者ではなく自立した事業主だという幻想を与えたのです。

ヤニス・バロファキス：マルクスは『資本論』の中でそれに一章を充てました。「出来高払い」制度です。資本家は労働者を集めて管理すれば安全やその他で責任や出費が発生するので嫌がります。だから自宅でリモートワークを出来高払いで請け負わせ、自家用車や自転車でウーバー配達を自己責任でやらせ、エア&ビーのように火災保険や修理費などを自

² 邦訳は『父が娘に語る 美しく、深く、壮大で、とんでもなくわかりやすい経済の話。』、関美和訳、ダイヤモンド、2019年。

宅を貸し出す労働者に負わせる賃貸契約を好むのです。資本家にとって厄介な問題なのは、例えばアマゾン倉庫やテスラ作業所のように、高価値を創造するためにはたくさんの労働者を一か所に集めなければならないことです。しかし、そこに集めた労働者を19世紀の英国労働者のように無権利常態のプレカリアートに留めようとします。プロレタリアートにしないのです。

プロレタリアートの出発点はプレカリアートです。長い歴史的過程を経てプロレタリアートになるのです。労働者としていくらかの権利を獲得するようになるのです。1929年の大恐慌、米国ではスタインベックの小説『怒りの葡萄』が描いたような大恐慌に襲われ、人為的に需要を作り出して資本主義体制を救わなければならない状態になりました。ニューディールですね。その後、ブレトン・ウッズ体制が出来上がります。特に資本主義に敵対するソ連が存在していたために、資本主義国家は自国の労働者を取り込むために、ある程度の権利を認め、所得の再分配を行い、教育や福祉を向上させました。そして、1991年、ようやくソ連が崩壊して、共産主義の脅威がなくなりました。資本家と政治家は、よかった、これで労働者にもう何も労働者にやる必要はない、今までやった分を取り戻すぞ、と大喜びしました。あなたが言及したカリフォルニア州のプロポジション22にはその取り戻しの一つです。

もっと悪い事例を付け加えます。テクノロジーやアプリケーションが人間をロボット化し、労働者を再びプレカリアートに逆戻りさせることがどんどん進行していることです。搾取が至るところで行われるようになったのです。フェイスブックにポストしたり、ツイッターしたり、Amazon.comに品物の評価を投稿すると、直接資本投下することになります。以前は賃金労働を通じて、つまり剰余価値創造で資本家に利潤（資本）を提供していたのが、今やそれが様々な形の収奪となっているのです。

今やすべての人間、中産階級も上流中産階級も、みんな携帯電話を使っています。グーグル・マップに自分の位置や行動をポストするとグーグル資本に献金することになります。投稿の報酬を貰うのではないのです。あなたはビッグ・テク企業やプラットフォームが倉庫や工場で労働者をロボット化すると言いましたが、労働者を職場で搾取するだけでなく、職場の外の人間からも搾取する方法を見つけているのです。

アレクサやグーグル・アシスタントについても同じことが言えます。このマシンは恐ろしく、まさにテクノ封建主義そのものです。このマシンはあなたが望むことを命令すれば動くマシンです。それで人間が主人で装置が召使いのように見えるのですが、実際はその逆で、装置のクラウド・ベース・ネットワークがあなたに何を欲しい、何を買いたいと思うように、あなたを飼育、条件付け、操作しているのです。装置が提供できるものから選択しているうちに、それが自分の望みだと思ってしまうのです。

・・・中略・・・

パスカル・ロバート：過去50余年にわたって展開されてきた反革命に話しを移しましょう。1968年以降世界的にも米国でも、1960年代に活動した新左翼運動や社会経済

学 — 米国ではニューディールと公民権運動の連合が一時的に成立しました — への反動として反革命が始まりました。1970年代に見たネオ・リベリズムがそれですが、あなたは現在と未来の西洋資本主義がそれとは異なる何かへと進化または退化していくと言っています。そのことを詳しく説明してください。

ヤニス・バロファキス：ええ、それこそが私が話したいことです。あなたは1968年と言って物事の核心に触れました。1968年～1971年の時代、リンドン・ジョンソンがホワイトハウスを去り、リチャード・ニクソンがブレトンウッズ体制を崩した1971年までの期間は、一大変革期でした。その経緯について簡潔にまとめます。トマス・エジソンのような人物らが電磁気学を使って米国初の送電や通信の大ネットワークであるコングロマリットを作り上げたのは、1900～1905年でした。このコングロマリットは驚くほど多くの費用がかかり、当時の状態の銀行ではとても融資ができませんでした。そこで銀行ら金融機関は合同・合併して規模を大きくして、大企業やコングロマリットに融資したのです。ここから生じたのがあの「狂騒の20年代」(Roaring Twenties)です。『グレート・ギャツビー』に描かれたような馬鹿げた大騒ぎ、電気の垂れ流しの消費、大浪費と大利益、大負債の時代が始まったのです。それが1929年の大恐慌で突然崩れ去ったのです。そこへ登場したのがニューディールです。頭の良い上流階級人のルーズベルトは金融精霊を瓶に封じ込めて、資本主義の植樹、国家資本主義を植えこみました。それがニューディールで、大戦中とその後も続いた戦時経済体制です。

戦時経済体制というのは大なり小なりソ連型経済です。ソ連型経済と異なる点は企業が私的所有であるところだけです。価格統制、生産量統制、企業の科学研究や開発が公的資金で行われ、配給制度もあり、私有財産制度を基礎にしたソ連型経済です。これは後に日本や中国が採用した体制です。その意味で中国経済はニューディール系統で、国家資本主義です。1944年にルーズベルトが始めたブレトンウッズ体制は米国のニュー・ディールを他の資本主義諸国に拡大したものです。

1944年～1971年は、ガルブレイスがテクノストラクチャー³と呼んだ独占企業体が価格や生産品や生産量を事実上一方的に決定し、テレビなどを媒体としたマーケティングを通じて消費者の趣向や欲望を支配・操作して、大量生産を行った時代です。しかし、同時に消費者の購買力を高める所得再配分も行われ、少し格差縮小もありました。金融精霊を瓶に封じ込めて自由にさせなかった。資本の自由活動を統制し、銀行の大型融資などを国家が監視・統制しました。資本主義体制がドルを基軸通貨として働きました。金本位制ではなくてドル本位制でした。しかし、ドルが資本主義世界の基軸通貨であるためには、米経済が強力で、国際収支が黒字でなければなりません。他国が吸収できる以上に多くのものを生産し続けなければなりません。ところが、1965年のベトナム戦争やジョンソン大統領の「偉大な社会」政策で、それが終わったのです。あなたが1968年を挙げたのに私が反応したのは、そのあたりがドル本位制が終わった時期であったからです。まだ

³ 企業の意思決定が所有者個人でなく、専門的経営陣に移行したことを表す言葉。

続いてはいましたが、それが終わることが見えていた時期です。米国が赤字国に転落し、ドルが基軸通貨の資格を失っていたからです。ドルだけが唯一世界通貨で、すべての為替レートは米1ドルに対しいくらかと固定されていました。1971年その体制が捨てられたのです。そのあたりの事情は自著『世界牛魔人—グローバル・ミノタウロス：米国、欧州、そして世界経済のゆくえ』に書きました。これは民主党も共和党も含め、米政治界が一体となって決めたことです。共和党ニクソン政権で財務長官だったジョン・コナリーは元民主党員でした。コナリーの下でブレトンウッズ体制による固定為替相場制の廃止に貢献したポール・ボルカーも元民主党員でした。

ニクソンもキッシンジャーもコナリーもボルカーも、その他みんな、米国が赤字国に転落しても米国のヘゲモニーを維持するにはどうすればよいかを必死に検討しました。彼らが出した解答は人類史上類まれな答えでした。いいじゃないか、このまま借金を増やそう、貿易赤字を続けて、ドイツ、オランダ、サウジアラビア、日本、そしてできれば中国の経営専門家を米国経済の中に掃除機のように吸い込もう。借金を返済するのではなく、債権者をウォール街へ誘い込み、ウォール街を世界の金融センターにしよう、というのが答えでした。そして、その通りになったのです。しかし、そうするためには、ニューディールが瓶に封じ込めた金融精霊を解き放たなければなりません。金融化を推し進めなければなりません。

ネオ・リベラリズムというのは金融化のイデオロギーです。ボルカー・ショック⁴を含む1980～2008年の時代は米国が世界の経営専門家と資本移動のリサイクル店でした。米国に債権を持つドイツ、オランダ、日本の経営専門家が米国へ入り、彼らの利益、後には中国の利益も米国へ入って行きました。米国の意図どおりのことが実現したのです。これがネオ・リベラリズムと呼ばれるもので、見事とも言える異常な怪物を正当化するイデオロギーにすぎません。その怪物が、2008年の金融危機で、潰れることになるのです。大西洋と太平洋を渡って津波のようなカネの流れがウォール街に流れ込み、ウォール街が売り出す様々なデリバティブや金融商品を買って漁ったのです。

2008年危機でそのたくさんの賭け事が崩壊したときから、私が「テクノ封建主義」と呼ぶもの形成が始まりました。2009年4月にFRB(米国連邦準備銀行)、イングランド銀行、欧州中央銀行、日本銀行、スウェーデン銀行などの先進諸国の中央銀行がロンドンで会議を開き、通貨をどんどん印刷して市場に流して銀行を助けること、他方民衆に緊縮財政を行うことを決定したのです。金融機関には社会主義政策、民衆には緊縮政策で危機を乗り越える決定をしたのです。

こういう政策の結果、二つのことが起きました。一つは金融の復活です。2009年以降、結局金融活動は下火になるどころか、かえってより盛んになりました。最近のコロナ・パンデミックで実体経済が落ち込み、人々が物を買わなくなったのに、格式相場は上昇し

⁴ 1979年に連邦準備制度理事会議長に就任したボルカーがインフレ対策として金融引き締めを行って株価が10%以上暴落した事件。

ました、中央銀行が印刷したカネが株式市場に流れ込んだからです。中央銀行がカネを印刷して金融機関へ流す仕組みは、市場とか競争とかの資本主義原理ではありません。株式市場は資本主義枠組みから分離したのです。地球から飛び出したのです。イーロン・マスクは火星へ行きたいようですが、金融界はすでに、中央銀行発行のカネを燃料にして火星へ向かって地球を飛び出しています。その一方で、一般民衆は劣悪で低賃金に閉じ込められ、公共サービスや福祉政策が削減され、格差が増大するばかりです。

中央銀行通貨発行が資本主義的利益に取って代わったのがテクノ封建主義の第一の柱とすれば、第二の柱はネット・プラットフォームが市場に取って代わったことです。アマゾン
は独占市場ではありません。**Amazon.com** は市場ではありません。かつての独占企業でルーズベルト政権時代に34の新会社に解体させられたスタンダード・オイル社と比べてみてください。どの町へ入ってもガソリン・スタンドはみんなスタンダード・オイルばかりでしたが、道路、公園のベンチ、レストランなどはスタンダード・オイル社ではなかった。ところが、**Amazon.com** へ入ったら、すべてが一人の人物が所有するものばかりです。個人が所有する封土、電子封土、デジタル封土の中に入り込み、その人が作成したものの
中で、その人が作ったアルゴリズムがあなたの首を掴んで右や左を向け、指定したものを
選ばせるのです。プラットフォームの中ではあなたはアルゴリズム、つまりアマゾンが
設定した条件のもとで売買するのです。それは自由競争を原理とする資本主義でも、独占
市場でもありません。

1979年以降の金融狂乱世界が2008年に崩れた後に出現したのが、ポスト資本主義
デストピアです。私はそれをテクノ封建主義と名付けました。その理由は、資本主義的
利潤創造メカニズムが国家供給マネーに、市場がジェフ・ベゾスやマーク・サッカード
などの個人に所属するネット・プラットフォームに取って代わられたからです。誰もが
資本家になれるわけがありませんが、資本は国家がばら撒いて、どこにでもあります。し
かし資本主義ではありません。ある意味では資本主義よりも酷いものです。

パスカル・ロバート：疑問があります。あなたの説は中央銀行のマネー・サプライ量的緩和
に基づいています。第二に、アマゾン、グーグル、フェイスブックなどのテクノクラシ
ー・プラットフォームが出現し、人件費などの経費を非常に少なくしてネット取引を全面
支配し、株価すらも操作できる巨大な独占体となり、今や強力な封建領主のように君臨し
ていることに基づいています。それらは産業会社でも製造会社でもありません。その指摘
には同意しますが、最近中央銀行がインフレ対策として貨幣の量的緩和を引き締めるため
に利子率を上げると言っています。今年の初めに **FRB** は利子率を3倍にしてインフレを止
めると発表しました。あなたの説と反対の傾向がでているように思えます。中央銀行がト
ップ1%に好き放題にマネー・サプライして成立していた偽りの繁栄に陰りが見え始めて
います。あなたの説と矛盾するのでは
ありませんか。

ヤニス・バロファキス：ええ、でも現実にはどの程度量的緩和の引き締めがすすんでいます
か？ 仮に私が述べたテクノ封建主義的状况がなければ、貨幣需要供給状態や金融市場の

現実、つまりかつてのマクロ経済学の視点で見れば、利子率は5%になっていても不思議じゃないです。ところがいまだに利子率は異常に低いのです。FRBは政策変更と言いながら、動きが非常に鈍いのです。何故でしょう。中央銀行のマネー供給に依存するゾンビ企業をたくさん作り上げてしまったからです。今となっては引くことも進むことも出来ない状態になっているからです。推移を見るしかないでしょうね。

例えばドイツですが、多くのドイツ人は、過去のハイパーインフレーションの苦い経験から、極度のインフレ恐怖症に陥っています。現在ドイツのインフレ率は7%、しかし利子率はまだマイナス0.8%です。おそらく、中央銀行は利上げをするでしょうが、随分手間取っています。理由は、テクノ封建主義体制もインフレの影響で苦境に陥っているのですが、利上げで通貨供給制限になれば、それらの企業が潰れてしまうかもしれないからです。

ウーバーは営業利益よりは低利の発行貨幣に依存しています。ネットフリックスも同じです。テスラには少し営業利益がありますが、大した額ではありません。これらの企業は中央銀行の通貨を低利で借り入れ、それを株式などの投機に運用して存続しています。利上げになれば大パニックになるでしょう。こういうジレンマがここしばらく続くでしょう。テクノ封建主義を潰すにはかつての大恐慌を上回る大恐慌を作り出すしかありません。

ジェイソン・マイルズ：恐ろしい事態になるかもしれませんね。

ヤニス・バロファキス：ええ、今、みなさんが怯えています。FRB、欧州中央銀行、イングランド銀行ら当局の中の物事を分かっている人々は、本当に怯えて、毎日苦勞していると思いますよ。もう一つ彼らが怯えていることがあります。中国のデジタル中央銀行通貨開発です。その方面では中国は賢くて、デジタル通貨導入へ踏み切っています。本来我々もはやくやるべきだったのです。国家保証の暗号通貨、デジタル通貨、元帳だけの取引方法、名前はともかくカネを不要とする世界は、社会主義的な未来社会にとって必要なことです。カネの操作で肥え太る中間業者を取り除いた世界です。現在の資本主義世界では、通貨を創造できる中央銀行と取引できるのは銀行だけです。量的緩和で出てきたカネは銀行へ渡り、銀行からグーグルやアップルへ渡ります。すでにカネの座布団の上に座っている企業はそのカネを人々が必要とするものの生産に投資するのではなく、自社株を買って、株価を吊り上げます。だから、中間業者をなくすために、我々一人ひとりが中央銀行口座、つまりデジタル財布である元帳を持つことです。中国はそういう方向に歩んでいるように見えます。

パスカル・ロバート：労働運動の視点からあなたのテクノ封建主義に関して質問します。デジタル企業が支配的になってから労働争議が減ったと言われています。ストライキが減ったばかりでなく、労働組合結成も少なくなったと言われています。闘争基盤がない個々の労働者は、例えば大量退職（Great Resignation）⁵というような形で、国家や中央銀行の

⁵ コロナ対策として支援金や失業手当増額を利用して、労働者たちが自主退職する現象が米国で顕著に見られる。中国でも「寝そべり運動」という労働拒否が若者の間で広がって

政策に抵抗しています。テクノ封建主義パラダイムの中では労働運動はどうなりますか。
ジェイソン・マイルズ：それに付け加えたいのは、家賃などのレントがどうなるかという問題です。

ヤニス・バロファキス：二番目の質問への答えの方が簡単です。中央銀行が垂れ流すマネーの洪水の中でレントが上がります。労働搾取よりレント搾取の方が金融資本主義の源泉となっていますから。それにコロナや戦争などでサプライ・チェーンが途絶して、インフレが加速します。そのため、借家人、米国、ギリシャ、フランス、ドイツなど世界中で住宅問題で闘っている人々に大悲劇が襲うでしょう。

第一の労働問題について話しましょう。前にも言ったように、私は『スタートレック』のファンですので、それに因んで言いますと、テクノ封建主義は『スタートレック』に出てくるボーグ⁶にやや似ています。ボーグに遭遇すると、彼らから「お前たちは同化する」「抵抗は無意味だ」と告げられる。これはジェフ・ベゾスがアマゾン倉庫の労働者に告げている言葉と同じです。ベゾスはこの言葉を労働者だけでなく、他の資本家、中小企業家、女性にも言っているのです。

では、それにどうやって抵抗できるのでしょうか。いくら英雄的でも19世紀的労働運動では太刀打ちできません。もちろん、ストライキは重要な闘争手段ですが、ストライキは諸刃の剣で、労働者の犠牲も大きいです。ストライキの損益勘定は労働者にとっても苛酷なものです。例えば、数年前にアマゾンでストを敢行した自主労組指導者クリス・スモールズがアマゾンから酷い仕打ちにあわされたことを思い出してください⁷。19世紀にはストをやった鉱夫は殺害や重傷の弾圧を受け、家族が飢えたが、それと同じような規模の犠牲がスト労働者に及ぶのです。プラスよりはマイナスの方が大きいのです。

場合によってはストライキの成果がゼロで、スト破りだけが得をすることがあります。現代のように労働者がローンで縛られている金融社会では、集団的労働争議の犠牲面が大きくなっています。3日間のストで労賃がなくなると、ローンで購入した家が抵当流れになる恐れがあるのです。家賃の支払いが遅れると立ち退き処分になるのです。だから、何か新しい闘争形態が必要です。自著『もう一つの現在』⁸で私はその必要を説明しました。

一例を紹介します。昨年と一昨年の12月のブラック・フライデー⁹に、私も関わったプログレッシブ・インターナショナルが、「メイク・アマゾン・ペイ」(Make Amazon Pay)という旗印を掲げて波状ストライキを開始しました。プログレッシブ・インターナシ

る。どちらも非人間的労働への抵抗である。

⁶ 架空の機械生命体。様々な星の知的生命体を同化して進化する。

⁷ 今年4月1日、彼はスタテンアイランドのアマゾン倉庫の労組結成投票で勝利し、正式に労働組合結成となった

⁸ 邦訳は『クソつたれ資本主義が倒れたあとの、もう一つの世界』江口泰子訳、講談社、2021年。

⁹ バロファキスは「12月」と言っているが、ブラック・フライデー（黒字の金曜日）は11月の第4木曜日の翌日に実施される大安売りのことで、年末商戦の幕開けを告げる行事。

ルは世界中の2億人の労働組合員から構成される運動です。昨年のブラック・フライデーの場合はベトナムからストライキが始まりました。次いでタイに広がり、次にバングラデイシュ、インド、ドイツ、米国ニュージャージー州、シアトルへと波及していきました。国際的封建領主に対する国際的ストライキ闘争でした。しかし、私はそれを十分な闘いだっとは思っていません。次にやる時は、国際的ストライキに合わせて世界中の消費者にその日一日は Amazon.com を訪れないように呼び掛ける国際的ボイコット運動をやるつもりです。

ボイコット運動は大きな犠牲を伴いません。永遠にアマゾンから買うなど言っているのではなく、ストの一日だけ不買せよと言っているだけです。Amazon.com への入力、物品を買うとか買ったものの品評を送ることがアマゾンの資本増殖に貢献することになることを思えば、このストライキとボイコットの結合戦術は、気候変動問題、労働者への待遇問題、納税問題などでアマゾンを追求する手段としても使えます。左派の進歩的金融研究者の協力を得て、ビッグ・テックが行うデリバティブや投機などを追求して反対する手段としても使えます。伝統的な争議方法とテクノロジー怪物が提供してくれるものを利用するハイテク反乱が有効だと思います。

パスカル・ロバート：時間の関係で次へ移ります。2000年代初頭にギリシャであなたの参加していたシリザ（急進左派連合）が政権を握ったとき、社会主義や社会民主主義を唱える勢力が政権の座につけるのだとして、世界中の左翼や進歩派が大喜びしました。しかし、そのシリザは欧州委員会、欧州中央銀行、IMF という寄生虫的資本主義3人組が要求する緊縮財政案に屈服して、その使命を果たせなかったという議論があります。あなたはシリザが失敗したと思いますか、それとも革命を経ずして選挙民主主義だけで資本主義体制を変革しようという民主社会主義思想の限界を示したものと思いますか。英国のコービンや米国のサンダースの思想は幻想にすぎないと思いますか。

ジェイソン・マイルズ：それと、一国社会主義は可能かという問題に関しても意見を聞かせてください。

ヤニス・バロファキス：失敗は大した問題ではありません。失敗はつきものです。失敗すれば再挑戦すればよいのです。シリザの場合は失敗より悪いです。それは裏切りでした。あなたの質問は短剣のように私の胸に突き刺さります。私はまだ2015年の事件から精神的に立ち直っていないのです。

シリザは一時期世界中の左派と進歩派に希望と夢を与えました。たった2年間で4%支持率から40%支持率の政党へ膨張しました。政権を構成して5カ月間、西側の債権者と闘いました。私は財務大臣として3人組と交渉しました。

3人組は最後通告を突きつけました。彼らが要求する緊縮財政を採用するか、それが嫌ならユーロ通貨圏からの追放、自力でやっつけろという最後通告でした。私は自力でやっつけていく覚悟でした。しかしシリザ政府は緊縮財政案を国民投票にかけて、国民の同意で3人組への全面降伏を正当化しようとしていました。当時の世論調査では3人組への抵抗を否定

する声の方が強いと結果でした。ところが、国民投票の結果は、政府は3人組に抵抗して闘えという声が62%もあったのです。国民は立ち上がったのです。ところがシリザ政府はその国民の声を無視して、西側債権者の要求に全面降伏する道を選択したのです。

60%の世論が抵抗路線を支持する判断を下したとき、私は首相のアレクシス・ツィプラスと4時間にわたって口論しました。彼は3人組の要求の緊縮財政へ屈服して援助を受けることを説き、私はそれへ抵抗し自力路線を歩むことを説きました。結局政府は降伏の道を選択しました。その夜私は財務大臣を辞任して閣外に出て、別の政党を結成しました。

私たちは世界の進歩勢力に大きなダメージを与えました。スペインのポデモスがこの影響で敗北しました。英国や米国の友人たちはシリザの屈服に大失望しました。

私は、社会主義を標榜しながら文化帝国主義に抵抗できないとして簡単に降伏したかつての同志たちを赦免する気になれません。一国だけで抵抗しても効果がないとよく言われますが、そんなことはありません。その気になれば、金融資本に抵抗し、国際金融機関に依存しないでやっていけます。もちろん大変な苦勞が伴うでしょうが。しかし、60%の国民にはその覚悟があったのです。金融戦争になることを覚悟して抵抗路線を支持したのです。ある老人が私に「わしは僅かな年金で暮らしている貧乏人だが、もし外国の金持ちたちと闘うなら、わしはその年金を失ってもいいと思っている」と言ってくれました。シリザ政府は国民投票に表れた国民の決意を見るべきだったのです。

ジェイソン・マイルズ：何故シリザ政府は屈服したのですか。何か計算があったのですか。

ヤニス・バロファキス：それに関しては『黒い匣：密室の権力者たちが狂わせる世界の運命』(Adults In the Room: My Battle with Europe's Deep Establishment)¹⁰を書きました。血を吐く想いで書いた苦しい作品です。

ジェイソン・マイルズ：パスカル、君はヤニスの傷に塩を擦りこんでいるよ。

ヤニス・バロファキス：時が経った今だから分かることなんですが、シリザ党の中には、首相も含めて原則よりは権力維持を優先する人々がいたのです。当時はそれが分からなかったから、激憤して飛び出したのです。彼らはそのまま政権を維持するために新自由主義勢力と手を組みました。ツィプラスはドナルド・トランプやベンヤミン・ネタニヤフとも手を組んだのです。アパルトヘイト・イスラエルやエジプトの独裁者とも同盟を結び、地中海で石油と天然ガスを採掘するためにエクソン・モービルと契約しました。かつてはこういう人たちを同志と呼んでいたのです。

・・・中略・・・

パスカル・ロバート：最後に、私にとって最も重要な質問をします。現在、米国では左翼や進歩派の政治的主張が黒人や褐色人の想像力に訴えるものが少ないのです。弁証法的で歴史的な唯物論では、西洋資本主義が原始蓄積時代から脱工業化時代へと進化する中で、

¹⁰ 邦訳は『黒い匣 (はこ) 密室の権力者たちが狂わせる世界の運命—元財相バロファキスが語る「ギリシャの春」鎮圧の深層』朴勝俊、山崎一郎、加志村拓、青木嵩、長谷川羽衣子、松尾匡訳、明石書店、2019年。

人種差別が重要な働きをしています。黒人は圧倒的に余剰労働、貧困層、産業予備軍という低い位置に置かれて収奪されてきました。リチャード・ウルフが言ったように、黒人は資本主義の緩衝装置の役割を担わされたのです。

かつての左翼運動、例えば60年代、30年代、19世紀の1880年代の左翼運動は黒人や褐色人の政治的想像力に訴えるものがありました。現在の左翼政治にはそれが少ないのは何故ですか。被差別有色人コミュニティで左翼運動がかつてのような支持と魅力を取り戻すためには何が必要でしょうか。

ヤニス・バロファキス：厄介な問題で、きちんと答えることが出来ればよいのですが。欧米の急進的左翼の問題は、階級的分析が不十分なことです。格差についてはずいぶんと語るのですが。私は格差とか公平をあまり問題にしていません。それよりも搾取が問題です。労働者の分裂が問題です。少数者が多数者から収奪する仕組みが問題です。マルクスが資本主義を批判したのは資本主義が格差を作り出すためではありません。彼の資本主義批判は資本主義が非能率であるから、人々を分け隔てて分裂させるから、搾取するから、略奪するからです。資本家の収奪が機能するところでは、必ず階級的、身分的、性別的、宗教的、皮膚の色的、その他様々な口実で人々を分け隔てる壁が作られます・・・中略・・・

一定の生産様式、本質的に競争・対立的で収奪的な生産・分配様式においては、必然的に人民の間に多元的な分裂・対立構造が生まれます。皮膚の色、左利きか右利きか、男か女かなど意味のない特徴で人々を階層化します。分裂支配です。

左翼は、この20年間、このような階級的視点から資本主義的収奪と人種差別を結び付ける分析をしっかりとやってこなかったと思います。

パスカル・ロバート：つまり、現代左翼は人種差別や性差別が資本主義の中で果たす役割の分析をおろそかにしているということですね。

ヤニス・バロファキス：ある意味では左翼は歴史的敗北者ですよ。左翼陣営の中に権威主義的専制主義がありました。共産主義者はグーラグ（矯正労働収容所）に送り込まれました。スターリンはまず共産主義者を殺害してから一般人民を殺害しました。現在でも左翼の集会や運動へ行くと、専制主義的権威が見られます。男性ホルモンのテストステロンが働いています。それは女性左翼やフェミニスト運動の中にも感じられます。だから私はいつも、左翼は赤旗と黒旗を掲げるべきだと主張しているのです。赤旗は革命の旗で、黒旗は我々の中の内部の闇を見つめる旗です。

・・・中略・・・

ジェイソン・マイルズ：本日はありがとうございました。いつかギリシャへ行って大切なところを案内してもらいたと思います。

ヤニス・バロファキス：命懸けでエーゲ海を渡るアフガニスタン人、パキスタン人、ナイジェリア人、インド人難民が閉じ込められている監獄を是非見るべきです。ユーロ・マネーが作り出した悲劇を見て欲しいのです。

